瀧澤克巳著

夏目漱石

洋々社刊

昭和三十年四月一日印刷
昭和三十年四月五日発行

定價五〇〇円

著者　瀧澤克巳
発行者　梅田道之
印刷者　柿崎忠一郎

東京都新宿区横寺町五十三番地
發行所　洋々社
電話(34)九〇六九番
振替東京一三一五一五番

大文社印刷・德住製本所製本

序

漱石沒後すでに約半世紀、その間、世の中は幾変転したが、かれに対する国民大衆の愛情は、筆者自身のそれとともに、今も少しも変らない。

なぜか。——詳しくは本文に譲るとして、一言でいふなら、かれの生活と作品には、いはば人の生命の共通の根もとから来る引力が、いつも何かの形で、積極的に働いてゐたからであらう。深く隠れてはゐるが、結局はただそれだけがわれわれを引きつけ、支へ、動かしているその力が、一作ごとにいよいよつつましく、あたたかく、かつあきらかな言葉となつて、人それぞれの悩みから、読む者の心を解き放たずにはおかないのだ。

思うに、こんにちのわれわれに最も飲けてゐるのは、漱石が人として苦しむこと、その作品を書くことによつて、一歩一歩そこへ還つて行つた永遠の生命の故郷——かれのいふ「大きな自然」（『明暗』百七十七）——の、その厳しさ、温かさ、爽やかさではないであらうか。現代の世界の不幸は、資本主義経済の不自然もさることながら、よく突きつめて見ると意外に手近かに、われわれが、そのイデオロギーの如何を問はず、すべての人に共通な、この一つの故郷の実在を無視して、いたづらに「一つの世界」を築かうと夢みてゐる、その倒錯の結果ではあるまいか。

いまもし誰かが、次々に世の新しいものを追ふ精力の幾分を割き、しばらくのあいだ孤独に堪へて、亡き漱石とともに自分自身の存在の事実に深く思ひを潜めるならば、おそらくはかれもまたやがて、これまでの自分が、いかにわれとわが生命

の自然に叛いて、かつての漱石と同じ死病を病んでゐたかを見るであろう。のみならず、その病ひが今日もなほ世界の到る処に「継続中」―(『硝子戸の中』三十)―であるかに驚くであろう。

しかも、何といふ幸ひ！　この事実を心から悲しむ者はすなはちまた、すでに死を眼近かに見た『點頭録』の漱石とともに、永遠に新しい希望に満ちて、今日この時の人生を踏み出す者でもある。

そのための暫時の手引きとして役立つ以外、私の『夏目漱石』もまた、何らの野心を有しない。

一九五五年三月一六日

福岡市大字名島

瀧沢克巳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

序……一

第一章　倫敦の經驗(「自己本意」の決意)……三

一、問題の提出—漱石の「自己」といふもの…三　二、『私の箇人主義』と謂はゆるエゴイズム…四　三、漱石の「自己本位の立場」に對する或る社會學者の批評…二　四、漱石の「自己本位」についてなほ殘る疑問—倫敦の經驗そのものとそれについての漱石自身及び多くの批評家の解釋との間のギャップ…一五　五、それまでの漱石(その一)—はどういふ意味で英文學は「解らない」と感じたか…二三　六、それまでの漱石(その二)—彼の時代と內面生活…二七　七、それまでの漱石(その三)—「英文學に欺かれたるが如き不安」の眞實の由來…三七　八、洋行—『文學論』著述の一念發起…四〇　九、彼の不安は何故消えたか…四五　十、彼が倫敦で「新しく摑んだ」「自己本位」の眞義—それと「東洋趣味」及び「一生涯の事業」との關係…四七　十一、「自己本位」の信念は何故『文學論』の著述を斷念した後にもその力を保ち得たか…五〇　十二、『私の箇人主義』に於ける漱石の體驗分析の曖昧とその原因…五一

第二章　『文學論』と神經衰弱……五四

一、歸る日まで…四四　二、歸つてから…六一　三、『文學論』の骨組…六一　四、『文學論』の方法及び意義…六九
五、『文學論』の曖昧若しくは缺陷…七二　六、神經衰弱―漱石と鏡子―危機…七八　七、日露戰爭―友人と門下生―表現の意欲…八四　八、漱石は何故彼の『文學論』を「學理的閑文字」と呼んだか―漱石の神經衰弱及び創作の意欲そのものと、それについての漱石自身乃至諸家の批評との間の隔たり…八九

第三章　作品の發展　その一……一〇三

第一節　『野分』まで……一〇三
一、『文學評論』特にその「スキフト論」とこの期の作品―正宗白鳥氏の疑問について…一〇三　二、『吾輩は猫である』第一より第十一、若しくは『倫敦塔』より『野分』に至る作品の基調とその推移…一〇七

第二節　『虞美人草』……一一八
一、『虞美人草』のテーマと構成…一一八　二、『野分』までの作品と『虞美人草』―『虞美人草』と『文學論』の根本問題…一一三

第三節　『坑夫』……一一七
一、『坑夫』の作意（「低徊趣味」）とその收穫…一一七　二、『坑夫』と『虞美人草』―『三四郎』への推移…一一五

第四章　作品の發展　その二……一一七

第一節　『三四郎』……一一七

一、甲野さんと廣田先生—廣田先生と野々宮さん…一三七　二、藤尾と美禰子—糸子とよし子…一四一　三、三四郎と與次郎—『虞美人草』の構成と『三四郎』の構成…一四四
第二節　『それから』……一四六
一、『それから』の構成（その一）—甲野さん・廣田先生と代助—藤尾・美禰子と代助—代助の生活態度…一四六　二、『それから』の構成（その二）—代助の不安…一五三　三、『それから』の構成（その三）—その不安を癒やすもの—平岡と三千代—決斷—新しき生と鬪ひ…一五五　四、單なる可能の世界より現實の世界への轉回若しくは肉體そのものゝ宗教的・倫理的意義の發見としての代助の告白…一五九　五、『それから』と『虞美人草』以前の作品との相違—『それから』に於ける戀愛及び結婚觀…一六一　六、『虞美人草』と『それから』—殘された問題…一六四
第三節　『門』……一六六
一、代助と三千代の場合と、宗助とお米の場合…一六六　二、『門』の構成—幸福な夫婦—子供の問題—お米の悲みと宗助の苦み…一六八　三、『門』に對する正宗白鳥氏の批評…一七四　四、『門』の藝術的缺陷—それについての小宮豐隆氏の辯護…一八一
第五章　作品の發展　その三……一八六
第一節　『思ひ出す事など』……一八六
—修善寺の大患とその意義について—

第二節　『彼岸過迄』……一九一
一、代助・宗助と須永市藏—市藏と松本—親子の問題…一九一　二、市藏と千代子—市藏の嫉妬心…一九七　三、市藏の嫉妬の眞實の原因—それについての片岡良一の批評…二〇四　四、『それから』・『門』・『彼岸過迄』と結婚の問題…二〇九　五、『彼岸過迄』の構成—「松本の話」—「雨の降る日」…その前の三つの短篇とその後の二つの短篇との關係（敬太郎と市藏）—結末—『彼岸過迄』の「深刻性」と「大衆性」…二一〇
第三節　『行　人』……二一七
一、『行人』の筋—一郎と直の場合—一郎の苦みと直の悲み—二郎—一郎はどんな意味で直の節操を試さうとしたか—その結果—一郎は何故旅に出たか…二一七　二、漱石の作品系列に於ける『行人』の意義—宗助と一郎…二二九　三、『行人』の一郎と當時の漱石…二三　四、『行人』に於ける漱石の結婚觀—三澤の言葉と『行人』に於ける樣々な夫婦—この問題についての小宮豐隆氏の解釋—宮本百合子氏の『行人』批評とその當否…二三五
第四節　『こゝろ』……二四二
一、『こゝろ』のテーマ—『こゝろ』とそれ以前の作品との關係…二四三　二、先生と青年—先生の遺書の動機…二四九　三、先生の死と乃木大將の死—艇長の遺書と先生の遺書…二五一　四、先生の死の後になほ殘る問題…二五九
第六章　「則天去私」とその後の作品……二六三
第一節　『硝子戸の中』と「則天去私」……二六三

一、自殺した先生とその後の漱石、『私の箇人主義』と『硝子戸の中』…二六三　二、謂はゆる現實の世界より眞實の世界（眞にあるが儘なる世界）への覺醒―「自己本位」より「則天去私」への轉回…二六九　三、新しき論理、倫理及び藝術…二七四　四、轉回の時期についての考察…二八一

第二節　『道草』……二八六

一、健三の立場…二八七　二、『道草』の作意若しくはこの作品に於ける作者の視點…二八八　三、この視點から見られた健三の立場―健三とその妻…二九三　四、健三とその島田その他の人々…二九六　五、「自傳小說」としての『道草』の方法とその後の「斷片」…二九九

第三節　『明暗』……三〇五

一、津田―小野さん・代助と津田…三〇五　二、お延―『道草』の健三若しくは作者自身とお延…三三　三、津田の問題―吉川夫人と小林の關心…三三　四、清子…三六　五、何が清子をかくあらしめたか―「則天去私」と『明暗』の主題…三三　六、清子とお延―『明暗』の結末と結婚の問題…三八　七、諸家の『明暗』批評と『明暗』の方法…三四　八、『明暗』と漱石の死…三五九

結論……三六二

附錄一　文藝批評の基本問題――拙著批評に答へて――……三六六

一、序…三六六　二、『文學論』成立　根本動機に關する再吟味…三六七　三、『私の箇人主義』における「自己本位」と『文學論』の根本動機に關する新しい解釋…三七五　四、同じ問題の舊い解釋における生けるものと死せるもの…三八〇　五、新しい解釋に立つて見た漱石の全生涯の展望…三八二　六、「客觀的」とは何か——片岡氏における根本的諸概念の曖昧について…三八八　七、いづれが「主觀主義的」「宗教主義的」か…三九八　八、結論…四〇五

附錄二　漱石の市民社會批評——「自己本位」と「則天去私」——……四〇九

前章「自己本位」の立場から…四〇九　一、「自己本位」の世界觀…四〇九　二、方法としての「自己本位」　三、「自己本位」の歷史觀…四二一　四、「自己本位」の立場から見た「封建道德」…四二八　五、漱石の「自己本位」と市民社會…四三二

後章「則天去私」の立場から…四四二　一、「自己本位」から「則天去私」へ…四四二　二、「則天去私」と「經濟學批判」の方法…四四七　三、「則天去私」の立場と市民社會の變革…四四九　四、「則天去私」の立場から見た「封建道德」…四五二　五、「則天去私」の歷史觀と世界觀…四五八　結び漱石の「則天去私」と唯物史觀…四六六

あとがき……四七七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夏目漱石

第一章　倫敦の經驗（「自己本位」の決意）

一

夏目漱石は誰にも増して、そして又他の何者であるよりも前に、自己自身に忠實な作家であつたと云はれる。

「藝術は自己の表現に始まつて自己の表現に終るものである」

事實、齡不惑を超えた漱石が『文展と藝術』（全集決定版第十三卷）といふ一文をさういふ宣言を以て始めたことによつても知られるやうに、人として、作家として、又批評家として、漱石の求めて已まなかつたものは、唯一つ、本來の彼自身であること、若しくは本來の彼自身と成ることであつた。そこに漱石死後四半世紀を經た今日、一方なほ絶えることのない、彼の「誠實」に對する多くの人々の敬愛と、他方彼の「頑なさ」に對するさまざまな立場からの攻擊との、第一の理由があるのであらう。しかし今日、親しく漱石の薫陶を受けた弟子達が彼の人柄を慕ふのは、果して彼らがその師によつて、今もなほ些かの變更を要しない、力ある生活の方法を學び得たからだらうか。それともそれは、たゞ遺された息子達がその偉大な親を稱へることによつて辛うじてその生存を保たうとするのに似た、空虛なうた聲に過ぎないのだらうか。萬一にも若しそのやうなことがあるとするなら、例へば岩波文庫の賣れ高に現れた漱石の作品に對する一般大衆の人氣（小宮豐隆氏『漱石襍記』序文）といふものも、その實はたかだか非生產的な智識層の虛榮の程度を示すに過ぎないことゝなるであらう。併し、

ながら他方、人々が或ひは遠く自然主義の流を汲み、或ひは近く、社會主義の餘勢を驅り、更には刻下民族主義の勢ひに乘じて、漱石の餘裕と理窟と個人主義とを非難する時、人々は果してその心の奥底に彼ら自身の自己喪失のかすかな疼きを覺えずに過すことができるであらうか。夏目漱石の頑なゝ自己を打ち倒すことは、取りもなほさず、我々自身を虚しく踊り狂はせる惡魔の風を次々にこの世界に吹き荒れさせることになるのではもるまいか。

漱石に對するかくも一般的な、而も持續的な人氣が、我が國民大衆の健實な成長の徵しであるか、それとも知らぬ間に深まり行く頽廢の證據であるか、それともまた一面に於いて健全に成長しつつ他面に於いて新たな病氣に蝕まれつつある矛盾の結果なのであるか、——私は今その何れであるかを俄かに斷定しようとは思はない。今日のやうな烈しい轉換の時代にあつて、批評家の最も警むべき陷穽が僞りの豫言者の如く己が權威を求めることにあるとするならば、我々はこの場合にも亦、早急に是非の判斷を下さうとする前に、少くも我々の漱石にとつてそれが凡てのものの始めであり終りであつた自己自身の何であつたかを、はつきりと突きとめて見なくてはならないであらう。

二

大正三年の十一月二十七日、學習院に於ける有名な講演『私の個人主義』の中で、漱石は、彼が彼自身の自己に眼覺めるに至つた經路を回顧して、次のやうに云つた。

「私は大學で英文學といふ專門をやりました。英文學といふものは何んなものかと御尋ねになるかも知れませんが、それを三年專攻した私にも何が何だかまあ夢中だつたのです。其頃はデクソンといふ人が教師でした。私はその先生の前で詩を讀ませられたり文章を讀

ませられたり、作文を作つて、冠詞が落ちてゐると云つて叱られたり、發音が間違つてゐると怒られたりしました。試驗にはウオーズウオースは何年に生まれて何年に死んだとかシエクスピヤのフオリオは幾通りあるとか、或はスコツトの書いた作物を年代順に竝べて見ろとかいふ問題ばかり出たのです。年の若いあなた方にも略想像が出來るでせう。果してこれが英文學か何うかといふ事が。英文學はしばらく措いて第一文學とは何ういふものだか、是では到底解る筈がありません。それなら自力でそれを窮め得るかと云ふと、まあ盲目の垣覗きといつたやうなもので、圖書館に入つて、何處をどううろついても手掛がないのです。是は自力の足りない許でなく其道に關した書物も乏しかつたのだらうと思ひます。兎に角三年勉强して、遂に文學は解らずじまひだつたのです。私の煩悶は第一此所に根ざしてゐたと申し上げても差支ないでせう。

私はそんなあやふやな態度で世の中へ出てとうとう教師になつたといふより教師にされて仕舞つたのです。幸に語學の方は怪しいにせよ、何うか斯うか御茶を濁して行かれるから、其日々々はまあ無事に濟んでゐましたが腹の中は常に空虛でした。空虛なら一そ思ひ切りが好かつたかも知れませんが、何だか不愉快な煮え切らない漠然たるものが至る所に潜んでゐるやうで堪らないのです。しかも一方では自分の職業としてゐる教師といふものに少しの興味も有ち得ないのです。教育者であるといふ素因の私に缺乏してゐる事は始めから知つてゐましたが、たゞ教場で英語を教へる事が既に面倒なのだから仕方がありません。私は始終中腰で隙があつたら、自分の本領へ飛び移らう〳〵とのみ思つてゐたのですが、さてその本領といふのがあるやうで、無いやうで、何處を向いても思ひ切つてやつと飛び移れないのです。

私は此の世に生れた以上何かしなければならん、と云つて何をして好いか少しも見當が付かない。さうして何處からか一筋の日光が射して來ないか知らんといふ希望よりも、此方から探照燈を用ひてたつた一條で好いから先迄明らかに見たいといふ氣がしました。所が不幸にして何方の方角を眺めてもぼんやりしてゐるのです。ぼうつとしてゐるのです。恰も囊の中に詰められて出る事の出來ない人のやうな氣持がするのです。私は私の手にただ一本の錐さへあれば何處か一ヶ所突き破つて見せるのだがと、焦躁り拔いたのですが、

生憎其雖は人から與へられる事もなく、又自分で發見する譯にも行かず、たゞ腹の底では此先自分はどうなるだらうと思つて、人知れず陰鬱な日を送つたのであります。

私は斯うした不安を抱いて大學を卒業し、同じ不安を連れて松山から熊本へ引越し、又同樣の不安を胸の底に疊んで遂に外國迄渡つたのであります。然し一旦外國へ留學する以上は多少の責任を新たに自覺させられるには極つてゐます。それで私は出來るだけ骨を折つて何かしやうと努力しました。然し何んな本を讀んでも依然として自分は囊の中から出る譯に參りません。此囊を突き破る錐は倫敦中探して歩いても見付りさうになかつたのです。私は下宿の一間の中で考へました。詰らないと思ひました。いくら書物を讀んでも腹の足にはならないのだと諦めました。同時に何の爲に書物を讀むのか自分でも其意味が解らなくなつて來ました。

此の時私は始めて文學とは何んなものであるか、その概念を根本的に自力で作り上げるより外に、私を救ふ途はないのだと悟つたのです。今迄は全く他人本位で根のない萍のやうに、其所いらをでたらめに漂よつてゐたから駄目であつたといふ事に漸く氣が付いたのです。私のこゝに他人本位といふのは、自分の酒を人に飲んで貰つて、後から其品評を聽いて、それを理が非でもさうだとして仕舞ふ所謂人眞似を指すのです。一口に斯う云つて仕舞へば、馬鹿らしく聞こえるから、誰もそんな人眞似をする譯がないと不審がられるかも知れませんが、事實は決してさうではないのです。近頃流行るベルグソンでもオイケンでもみんな向ふの人が兎や角いふので日本人も其尻馬に乘つて騒ぐのです。まして其頃は西洋人のいふ事だと云へば何でも蚊でも盲從して威張つたものです。だから無暗に片假名を竝べて人に吹聽して得意がつた男が比々皆是なりと云ひたい位ごろ〳〵してゐました。他の惡口ではありません。斯ういふ私が現にそれだつたのです。譬へばある西洋人が甲といふ同じ西洋人の作物を評したのを讀んだとすると、其評の當否は丸で考へずに、自分の腑に落ちやうが落ちまいが、無暗に其評を觸れ散らかすのです。つまり鵜呑と云つてもよし、又機械的の知識と云つてもよし、到底わが所有とも血とも肉とも云はれない、餘所々々しいものを我物顔に喋舌つて歩くのです。然るに時代が時代だから、又みんながそれを賞めるのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com